2017 年 4 月 15 日（土）

1 限（10：00－11：20）　※この時間帯はこの一コマのみです。

●講義タイトル：「繰り返し」から入門する言語学
講師：長屋　尚典（東京外国語大学）
講義概要:

人間の言語には語の全体や一部を繰り返す現象がよく観察されます。たとえば、日本語でも「村々」「神々」のように繰り返すことで数の多さを表したり、「ドンドン」「ワンワン」などのようにオノマトペを形成するために繰り返しが使われることもあります。フィリピンで話されるタガログ語では kainin「食べる」から ka~kainin「食べるだろう」のように語の一部を繰り返すことで未来形が形成されます。このように語の一部や全体を繰り返して新しい語をつくる手段のことを重複（ちょうふく）と呼びます。単に繰り返すだけの原始的な方法のように感じられるかもしれませんが、実は、ヨーロッパの諸言語を除く世界中の言語で頻繁に使われており、人間言語にとって極めて重要な語形成方法です。

本講義ではこの重複についてあれこれ考えながら、言語学と呼ばれる学問分野の「はじめの一歩」をみなさんと一緒に踏み出したいと考えています。まず、重複が語のどの部分を繰り返すかを捉えるためには、子音、母音、音節などの音声学・音韻論の知識が必要になります。次に、重複が新しい「語」を形成するとき、それは屈折なのか派生なのかも問題になりますし、そもそも語とは何かも考えないといけません。これは形態論と呼ばれる分野です。さらに、語よりも大きな句のレベルでの重複、つまり反復は統語論の範囲に入ります。もちろん忘れてはならないのは重複の意味論です。興味深いことに、重複は世界のどこの言語でも類像的な意味を表すことが知られています。数の多さ、繰り返し、意味の強化、などです。対象に対する愛着や侮蔑のような語用論的な効果さえも持つことがあります。

このように、重複という現象をいろいろな角度から分析しようとすると、言語学という学問分野の全体像が見えてきます。一つの現象に対するアプローチは多様であり、複数のアプローチを知ってこそ初めて言葉の不思議が見えてくることも分かってきます。そういうことをこの講義では考えたいと思います。

2 限（11：40－13：00）　※ここからは同じ時間帯に二つの講座が開講されます。

●講義タイトル：実験言語学入門
講師：川原　繁人（慶應義塾大学）
講義概要:

伝統的な言語学のアプローチでは、分析者の「内省」を用いる方法が主流でした。しかし、近代科学技術の発達とともに、我々の言語知識を内省に頼らず研究する方法が台頭してきました。例えば、音声学の授業では「「あ」は低母音で「い」は高母音である」と教わりますが、これらの母音の舌の動きを、医療で使う MRI を用いて実際に観察することが可能です。また日本人が苦手とする、英語の[r]の発音も MRI によって、どのように舌が動いているのか客観的に観ることができます。文レベルの問題に関しても、ある文の処理の難しさが、その文を読んだ時の眼球の大きさと相関しているという報告があります。さらに、「日本語における「無声化」した母音は舌の動きも消えているのかどうか」というような内省だけでは判断できないような問題も最新の科学技術を用いて検証することができます。本講座では、このような実験を用いた言語へのアプローチを紹介します。伝統的な言語学の手法を知っている方はもちろん、言語学に触れたことのない方も大歓迎です。

●講義タイトル：文法形式の多義性と体内感覚
講師：尾上　圭介（東京大学名誉教授）
講義概要:

目の前で人形が動くのを見て驚いて発することばとしては、

(a)あ、人形が動く！

(b)あ、人形が動いている！

(c)あ、人形が動いた！

などがある。ことに(a)と(b)は意味が大きく重なっている。けれどもその二つの間には、体内感覚的と言ってもよいような微妙な違いがある。その表現性の差はどこから来るのであろうか。

ある文法形式（例えば動詞スル形）のある一つの用法（例えば眼前の運動の描写）に関する母語話者的な直観は、その形式自身の多様な用法を経験するところから母語話者の内面において自然に形成されるものなので、観察者（研究者）の立場からはその形式の（他の用法を含めた）多義性の構造の解析を通してその形式自身の語性とも言うべきものを発見することが必要であり、そのような語性を持つ形式がそのような場面（眼前描写）で使われうることの論理とその場合に他の形式とは違った表現性がもたらされる論理を説明することが必要である。

ほぼ同じことを言う文の中での助詞の使い分けをめぐっても、体内感覚的と言ってよいような微妙な意味の違いがある。

(d)風も ないのに木の葉が散る。

(e)風が ないのに木の葉が散る。

(f)風は ないのに木の葉が散る。

「も」のこのような用法（とりあえず否定補足と呼んでよかろう）の背後には、並列や累加を中心とする一群の多様な用法があり、それらとつながるものとして、母語話者は(d)の意味を直観しているのである。観察者としては、「も」の多義性の記述と多義性の構造

解析を通して「も」の語性を把握することが必要であり（その過程で「係助詞とは何か」という大問題と格闘することになる）、その中で(d)の用法を位置づけることになる。

その文法形式の使用時の体内感覚の由来を知るにはその形式の多義性の構造解析が必要になる場合が多いが、大きな目で見ると、一つの形式が場合によって異なった多様な意味を表すということは言語というものの創造性の根幹でもある。動詞スル形にしても助詞「も」にしても、一つの形式の多様な用法の中にその形式自身の固有の捉え方が貫徹しており、その固有の捉え方のいわば適用の仕方の種々相として、表す意味の多様性があるのである。

この意味で、本年度の講義は特に認知言語学的な見方と関係が深い。

3限（14：00－15：20）

●講義タイトル：認知言語学

講師：池上　嘉彦（東京大学名誉教授）

講義概要:

２０世紀から２１世紀にかけて、言語研究の主流は＜構造言語学＞から＜変形生成文法＞、そして＜認知言語学＞へと、殆ど目まぐるしいと言える位の入れ替わり、立ち代わりを経てきた。筆者はたまたまこの三つの時期を身近なものとして体験して過ごすという幸運に恵まれた。そういう特権を踏まえて言うならば、現在の＜認知言語学＞をそれ以前の流れと区別して特徴づけるのは（例えば、＜比喩＞とか＜プロトタイプ＞といった問題を扱うというようなことではなくて）言語の研究が漸く従来の＜主体なき言語学＞という批判からの脱却を果たしたということ― つまり、言語と関わる営みにおいて＜主体＞として振舞う存在としての＜話者＞に正当に向き合うスタンスをしっかりと理論の枠内に組み込んだということである。＜構造言語学＞では、＜話者＞としての人間は我慢できないほど＜主観的＞に振舞い兼ねない存在、科学に要請される客観的で厳密な処理に適わない存在、として棚上げしておくのがよしとされた。言語研究においては＜言語＞そのものの記述だけに専念すべしという窮屈な自己規制が課せられていた時期である。＜変形生成文法＞では、言語研究の課題は＜人間の言語能力＞の解明とセットされ直され、＜話者＞を正当に導入、復権がなされるかに見えたが、既に早い時期に、言語理論で考察の対象とすべきは＜理想的な話者＞（つまり、言語の規則を完璧に体得し、その運用にいささかの錯誤も犯さない存在）という理解が導入された。最終的には＜話者＞は＜規則＞とその運用という形に解体され、見事に消去されてしまう。そういう＜話者＞が＜認知言語学＞の段階に至って漸く、本来の＜認知の主体＞として言語の獲得、運用から創造に至るまで、すべての過程に深く関わる存在としての位置づけを与えられたということである。＜話者＞がこのように位置づけられるならば、次に来る問題は、＜認知の主体＞としての＜話者＞による発話に際しての＜事態把握＞（construal）と呼ばれる営みであることは、自明の流れであろう。

講義では、まずこのあたりまでの流れを簡潔に提示した上で、あとは＜話者＞（＜自己＞）

のゼロ化や他者化、＜事態把握＞の原点としての＜話者＞、いわゆる＜人称制限＞とその広がり、＜移動動詞＞や＜授受動詞＞における直示性、などから、最近の＜証拠性＞（evidentiality）研究で＜１人称効果＞と呼ばれる現象まで、基本的に日本語を中心に言語学的な扱いを考察してみたい。そして、最近、人工知能研究や心理学で関心を集めつつある＜１人称研究＞との関わりにも触れてみたい。

●講義タイトル：移動現象を通じて言語を考える
講師：髙橋　将一（青山学院大学）
講義概要:
人間言語の特徴的性質として、移動現象があります。移動現象とは、ある要素が、通常とは異なる位置に現れる現象です。例えば、John bought the book のように、英語では通常、目的語が動詞の右側に現れますが、疑問文では、Which book did John buy?のように動詞の左側に現れます。本講座では、この移動現象を通じて私たちの言語について考えていきます。まず、移動は、方向の違いにより 2 種類に分けることができます。左方向への移動では、上記の wh 疑問文でのように、ある要素が、通常現れる位置より左側に現れます。また、右方向への移動では、John gave the book that he had read to Mary と John gave to Mary the book that he had read の文で見られるように、ある要素が、通常現れる位置より右側に現れます。左方向への移動は、A 移動、Ā移動と呼ばれる 2 種類に大別することができます。本講座では、それぞれの移動の特徴的な振る舞いを概観し、2 つの種類の左方向への移動の本質的な違いについて考えていきます。また、Ā移動の中にもいくつかの種類があると考えられています。異なった特徴を見せる複数の種類のĀ移動に対して、可能な分析的アプローチを考えていきます。そして最後に、2017 年度の理論言語学講座「生成文法 II」の主要なテーマである右方向への移動が関わると思われる現象を取り上げ、そこで観察される特徴を概観します。また、右方向への移動が示す性質と左方向への移動が示す性質は、様々な点で異なることが知られています。これらの違いを検討することで、私たちの言葉について理解を深めていきます。

4 限（15：40－17：00）

●講義タイトル：社会言語学入門
講師：嶋田　珠巳（明海大学）
講義概要:
「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこし厳格なイメージも、「社会」言語学になるとどことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるで

しょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。

そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、いちいち人を、いちいちコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういったところから展開されます。

この講義では、日頃みなさんがすでにもっているかもしれない、ことばについての小さな気づき―いわば社会言語学の種のようなもの―について、また、わたしが言語学のこんなところが楽しい！ 素晴らしい！ と思っているようなことについて、お話してみたいと思います。比較的自由に、それでいて社会言語学はどんなことをする学問領域かを感じていただきながら、みなさまと有意義な時間がすごせればと思います。

●講義タイトル：文法原論
講師：梶田　優（上智大学名誉教授）
講義概要:

理論言語学が取り組んでいる研究課題のなかにつぎのようなものがあります。

（１）品詞、機能範疇、構文などの多様性と画一性をどのように説明するか。

（２）述語構造、論理構造、情報構造、発話行為の四者は、統語構造への写像においてどのように相互に作用し合うか。

（３）表現手段（音声・ジェスチャー）の線状性と表現内容（各種意味の複合）の非線状性が文法の形成にどのような影響を与えるか。

これらの問いは、生成文法、言語類型論、認知言語学などいずれのアプローチにも共通の根本的な問いであって、言語の本質を理解するには、これらの問い自体の意味を理解しておくことが重要と思われます。

今回の春期講座では、最近数年間の理論言語学研究のなかから具体例をいくつか見ながら、上記の問いの意味を説明し、今後取るべき研究の方向について、動態的・過程説的な文法観からの私見をごく概略的に述べます。そのあと、5 月からの理論言語学講座（前・後期）で、従来の静態的・出力説的な文法理論のもとではできなかった新しいタイプの説明が、動態的・過程説的な枠組みでは可能になるということを、もう少し詳しく見ていく予定です。

2017 年 4 月 16 日（日）

1 限（10：00－11：20）

●講義タイトル：認知言語学からみた命名論
講師：森　雄一（成蹊大学）
講義概要:

私たちのまわりにはさまざまな事物がありますが、その多くに名前がつけられています。どのようなプロセスでその名前が生じるか探究する学問分野が命名論です。本講義では、命名論が認知言語学のなかでどのように扱われているか、あるいは扱うことが可能か、主に２つのトピックを通して考えてみることにします。

講義前半では、認知言語学以前の代表的な命名論研究である、森岡健二・山口仲美(1985)『命名の言語学』（東海大学出版会）で取り上げられているいくつかの観点に触れたのち、その論考で萌芽的に見られた「表示性」と「表現性」という概念を検討したいと思います。大ざっぱに言って「表示性」とはその事物が属するカテゴリーらしさを、「表現性」とはその事物の名のそのカテゴリー内での独自性を表す概念です。たとえば、米の品種名として、「コシヒカリ」は「表示性」が高く、「恋の予感」は「表現性」が高く感じられます。何故そのように感じられるのか、また、どうしてそのような名づけが行われるのか、データを見ながら一緒に考えてみましょう。

講義後半では、認知言語学にとって重要な分野である比喩について簡単に説明したのち、命名と比喩の関係について考えたいと思います。比喩には、直喩（シミリー）、隠喩（メタファー）、換喩（メトニミー）、提喩（シネクドキー）という４種があるのですが、命名に強く関わっているのはどれでしょうか。また、「トマト銀行」や「銀河高原ビール」といった名前には比喩は関わっているでしょうか。

前半も後半も、具体的な名前をできるだけ思い浮かべながら受講していただければ、より興味が増すと思います。命名論はとっつきやすく、しかしながら奥が深い分野です。80 分の短い時間ですが、名前の世界にひたってみましょう。

なお、本講義の受講には予備知識はまったく必要ありません。気軽にお出でいただければと思います。

●講義タイトル：歴史的に見た日本語　序説

講師：川村　大（東京外国語大学）

講義概要:

日本語の歴史を学ぶことは、何も懐古趣味の持ち主（？）のためだけに必要なのではありません。現代日本語がなぜこのようにあるのかについて少しでも疑問が生じた時には、日本語史に関する知識が少なからず役に立ちます。

例えば、「観音」は「かんのん」、「因縁」は「いんねん」と読みますが、「音」には「のん」という読み方は（少なくとも伝統的には）ありませんし、「縁」には「ねん」という読み方はありません。なぜ「かんのん」「いんねん」という読み方をするのでしょうか。また、「観音」や「因縁」は「観」と「音」、「因」と「縁」の間にｎが挿入された形になっていて、これに似た語形はいくつか集まります（「反応」「山王」など）が、これによく似た形式で間にｍを挟む「三位（さんみ）」「陰陽師（おんみょうじ）」はこのくらいしか思いつきません。なぜｍはわずかで、大抵はｎなのでしょう。こうした問いにきちんと答えるためには、日本漢字音の歴史や撥音（はねる音）の歴史に関する知識が必要です。

日本語の歴史を知ることの効用はそれだけではありません。本格的な知識を身に付けて

いる人は、いわゆるガ行鼻濁音の消失やラ抜き言葉の一般化を「ことばの乱れ」などと嘆くことなく、日本語の変化過程の中に位置づけて理解することができます。また、方言を訛った言葉・汚い言葉と笑うことなく、日本語の古い姿を留めている面や独自に進化を遂げた面を観察し、日本語のあり得る姿の一つとして位置づけることができます。言葉の歴史をよく知るほど、言葉をめぐる狭い「正しさ」から自由になることができるのです。

この講義では、5 月からの本講義の導入として、現代語の音声・語彙・文法からいくつかの項目を取り上げ、歴史の観点から見なおしてみようと思います。

2 限（11：40－13：00）

●講義タイトル：音声学―言語の多様性
講師：斎藤　純男（東京学芸大学）
講義概要:

人間が言葉を話しているときに発する音を音声といいます。私たちは毎日その音声を使って暮らしていますが、日常生活でそれを意識することはほとんどないのではないでしょうか。しかし、意識してよく眺めてみると、音声は非常に多様であると同時にそこには整然とした仕組みがあることが分かり、大変興味深いものです。

本講義では、音声はどのようにして作られるのか、人間が発することのできる音声にはどういうものがあるのか、世界の何千もの言語においてどんな音声が使われているのか、などについて、実際の例を聞きながら音声の多様性の一端を学びます。

●講義タイトル：言語心理学
講師：佐野　哲也（明治学院大学）
講義概要:

今年度の春期講座では、第一言語獲得研究のなかで発達にかかわるいくつかの代表例を紹介します。

こどもの言語発達を観察すると「初期には大人の場合と異なるもの」がみられることがあります。

こどもが通常第一言語を容易に獲得することを考えるとこどもには生まれつきの言語能力が備わっていると考えられますが、それにもかかわらず「初期には大人の場合と異なるもの」が観察されるのはなぜなのか、というのが第一言語獲得研究のなかで発達にかかわる一つの大きな問いになると考えられます。

今年度の春季講座「言語心理学」では、この問いについての諸研究を整理して紹介します。これは「言語心理学」研究の興味深い一例になりますので、今年度の「言語心理学」受講への橋渡しにもなると考えています。

具体的なトピックとしては、英語の動詞屈折語尾の獲得、日本語の助詞「が」「を」「の」の獲得、にみられる発達の遅れをとりあげる予定です。これらの現象について、仮説をた

てて予測を検証することで、ここでとりあげられている発達の遅れの原因について考察します。

これらの諸研究から、「初期には大人の場合と異なるもの」がこどもの言語発達において観察されるのはなぜなのかという問いについて、答えの可能性をしぼりこんでいく試みについておはなしします。

3限（14：00－15：20）

●講義タイトル：日英語対照音韻論―超重音節をめぐる問題
講師：窪薗　晴夫（国立国語研究所）
講義概要:

５月に始まる理論言語学講座では、「日英語対照音韻論」と題して、日本語と英語の音韻構造の異同を音節構造、音節量、アクセント、異化現象の視点から考察する予定です。この講義では本講座のイントロとして音節量(syllable weight)の問題を取り上げ、３モーラからなる音節―超重音節(superheavy syllable)―が日英語でどのように避けられているかを考察します。

英語をはじめとするヨーロッパの諸言語では、もっぱら閉音節短母音化という変化によって超重音節を解消しようとしてきました。その名残が、five—fifty, go—gone, do—does/done, say—says/said などの語に、長母音―短母音の交替として残っています。面白いことに、音節構造が単純だと言われる日本語にも超重音節を避けようとする力が観察されますが、日本語にとりわけ興味深いのが、この構造を避けるために複数の手段を用いるという点です。英語と同じような閉音節短母音化（例：arrange →アレンジ、*アレインジ）だけでなく、促音化阻止（例：peak → ピーク、*ピーック）や再音節化（ain → a.in）の現象も観察されることが知られています。本講義では分析の対象を標準語以外の日本語方言に広げ、「の」が「ん」に縮約される現象（例：僕のうち→僕んち）などにも制約として働いていることを論じたいと思います。

●講義タイトル：言語哲学への招待
講師：峯島　宏次（お茶の水女子大学）
講義概要:

言語哲学は、現代の意味論・語用論、またその背景にある現代論理学と深く結びついた分野です。言語哲学と現代論理学の誕生のひとつの端緒ともなった問題を日本語の例に基づいて紹介しましょう。次の文を見てください。

(1) <u>私のことを好きな人</u>がいる。

この文は、下線部の「私のことを好きな人」という表現によってある人物を指示し、その人物について何かを述べている文だと考えられるかもしれません。しかし、その種の分析に問題があることは、(1)の否定形を考えてみると明らかになります。

(2) <u>私のことを好きな人</u>はいない。

この場合、下線部の「私のことを好きな人」が何らかの人物を指していると考えるのは奇妙です。(2)はそのような人物がまさに存在しないことを述べる文だからです。では、(1)や(2)のような存在文の正しい分析はどのようなものになるでしょうか。私たちは言葉を分析するときにしばしば、「指示対象」という概念に頼ります。しかし、(1)や(2)の例を考えると、言葉の「指示対象」とはいったい何でしょうか。哲学者・論理学者の G. フレーゲは、自らが創案した現代論理学の考え方に基づいて、こうした問題にひとつの解答を与えました。現在では、フレーゲに始まる言語分析の手法は、言語哲学のみならず意味論・語用論にまで及ぶ、魅力的な学際的分野に成長しています。

この講義では、理論言語学講座（前期）「言語哲学」への導入として、この存在文の分析を手がかりに、言語哲学と理論言語学（意味論・語用論）との関係についてお話しします。特に、指示と存在という言語哲学・論理学で論じられてきた概念が、私たちがふだん使っている言葉の分析にどのように役に立つのか、具体例をみることを通して考えたいと思います。

4 限（15：40－17：00）

●講義タイトル：生成文法 I
講師：今西　典子（東京大学）2017 年 3 月まで
講義概要:

「生成文法」では，たとえば日本語を母語とする人の脳内には日本語の知識が蓄えられており，それを無意識に使って日本語でさまざまな言語活動をしていると考えます。言語をこのように捉えると,「言語とはどのような性質を持った知識であるのか，また,他の知識と言語知識はどのように違っているのか」，「そのような性質を示す言語知識は生後どのように生じるのか」,「生じた言語知識は理解や発話などの過程でどのように使用されるのか」,「言語は脳のどの部分にどのように蓄えられており，理解や発話などの過程では脳内にどのような神経生理学的変化がみられるのか」というさまざまな問いが生じます。生成文法はこれらの問いに対して統合的な答えを与えようとする試みで，人間のこころの性質を解明しようとする研究領域の一端をなすものです。春期講座では、このような研究目標をかかげて人間の言語機能の解明を進めている生成文法について理解を深める一歩として,「削除」や「疑問と応答」という言語事象を例として、言語間変異や言語獲得に関する資料を踏まえて、普遍文法と個別文法に接近する研究方法を概観します。

●講義タイトル：語用論
講師：酒井　智宏（早稲田大学）
講義概要:

グリーンランドと南極大陸の大きさをイメージできるでしょうか？グリーンランドは日本の約 6 倍(=オーストラリア大陸の約 0.3 倍)、南極大陸は日本の約 37 倍(=オーストラ

リア大陸の約 1.5 倍)の面積です。メルカトル図法の地図の周辺部に位置する島や大陸については、大きさを具体的にイメージすることが難しいのではないでしょうか。また、南極大陸に定住者がいないのはわかるとして、グリーンランドはどうでしょうか。たとえば首都ヌークの人口は？街並みは？

「語用論」とは「言語学のゴミ箱」と呼ばれてきた分野で、この呼び名には(i) 言語学の周辺部に位置する、(ii) いろいろなものが混ぜこぜになっている、という意味が込められています。そのため、このゴミ箱がどれくらいの大きさなのか、どれくらいのものが入っているのかがイメージしにくくなっています。

このゴミ箱を分解すると、「語用論」の「語」は「言語」を、「用」は「使用」を指します。「言語の使用」の場には話し手と聞き手がいます。独り言の場合は一人二役です。ここでたとえば「話し手から聞き手に伝えられるメッセージはどこにあるか」と問うてみましょう？話し手が使った言葉の中？いや、これでは「言外のメッセージ」が説明できません。では話し手の心の中？いや、これでは「話し手が意図していなかったのに伝わってしまったメッセージ」が説明できません。では聞き手の心の中？いや、これでは「話し手が意図していたのに伝わらなかったメッセージ」が説明できません。では話し手と聞き手の一致した意図の中？いや、これでは「話し手が意図していながら、その意図を伝えることは意図していないメッセージ」が説明できません。このように「メッセージ」は幾重にも折り重なっているのです。

この講義では、言語学のゴミ箱の蓋を開け、何がどれくらい混ぜこぜになっているか、少しだけ覗いてみたいと思います。